

# 医者も知らない平穏死



連載⑥

人生の終わりを自然に穏やかに迎えたい。死を先延ばしにする延命治療を受けない選択肢もある――。今ではそう考えている私ですが、勤務医時代はそうではありませんでした。「患者さんの命を延ばすことこそ医者使命」と信じ、最後の最後まで「治療」を行っていました。

時は「退院できるかも」というレベルまで回復したものの、その後病状が悪化し、入院3カ月目で危篤状態に陥りました。M君は薬の副作用で顔がパンパ

研修医の時に出会ったM君。彼は私と同じ26歳。急性白血



(写真はイメージ)

## 無意味な臨終儀式

へ長尾和宏) 長尾クリニック院長。日本尊厳死協会副理事長。著書に『平穏死』10の条件」など。

ンに膨れ上がり、髪の毛はすべて抜け、口の中はカビによる感染で血だらけ……。だれもが「おそろく今夜がヤマだろう」と考えていたその夜、私はなんとか彼の命をつなぎ留めようと、あらゆる延命治療を施しました。

最後は、すでに呼吸停止した彼の上に馬乗りになり、涙を流しながら心臓マッサージをしたのです。肋骨を折りながら……。

あれから30年近く経ちました。が、あの無意味な「臨終儀式」を後悔しています。人生の終わりで、なんでこんなに苦しまなあののやろ。M君は、入院している

この3カ月間、痛くてつばっかりやつたやないかかかかベッドで過ごすばかりでも好きなところへ行けへやないか……。そんな思い今ならハッキリと大きい。余計な苦するから、患者さんは苦す。自然な最期を迎える要なのは、人工呼吸や水分補給ではない。患者を取り除き、旅立つ「生きる」手助けをする。医者の本当の使命だ。

ただ、病院ではなかなか通用しない。それは、「医者の使命」「死は敗北識。だからなのです。

(火